

では、COD・大腸菌群数ともに湿地帯とロビト湾を結ぶ水路付近が最も水質悪化が顕著となっている。この要因として、下水処理施設が機能していない、若しくは未処理の生活廃水が流されているなどが考えられる。

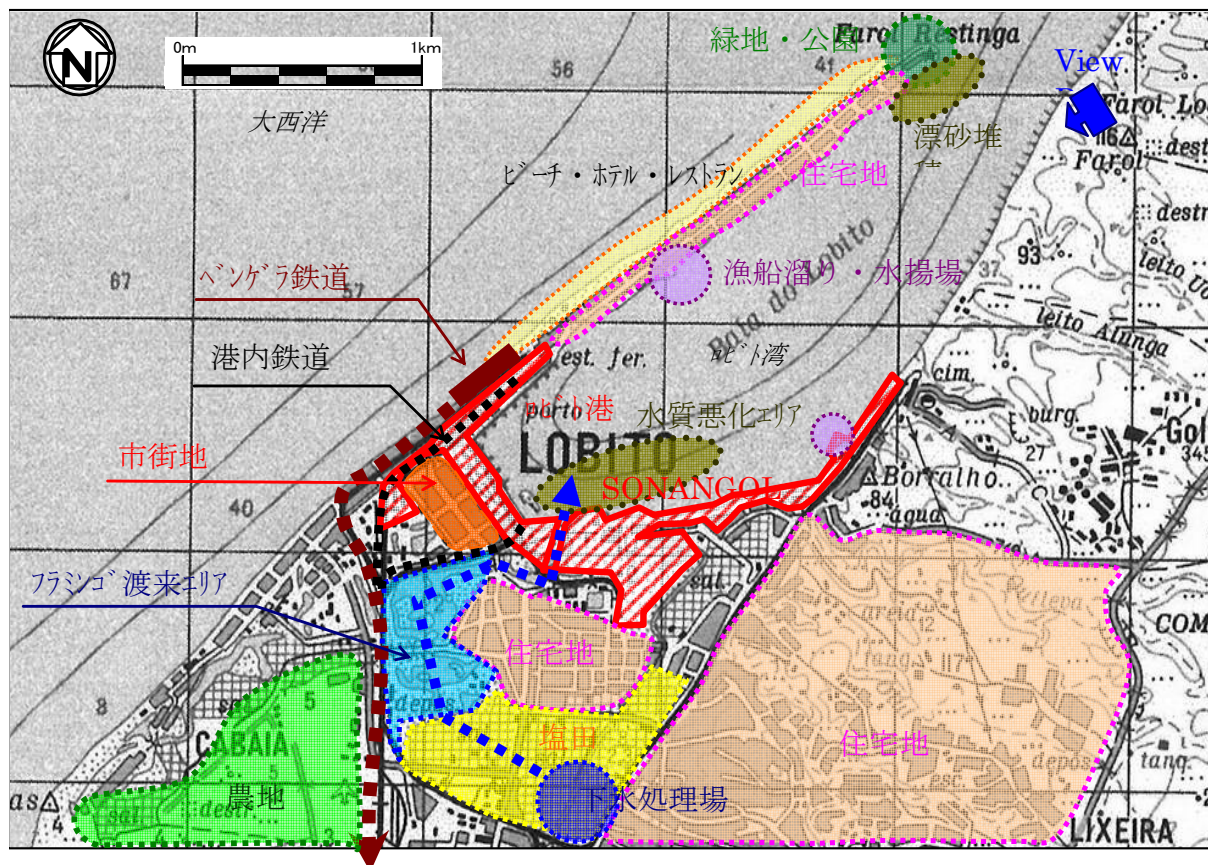


図 7-3 ロビト港周辺の環境特性

### 7.2.3 ナミベ港

ナミベ湾は、南北約 8km、奥行 5km のすり鉢状の湾であり、湾口中央部の最深部で約 600m の水深がある。湾岸沿いは、南北に位置する港湾や漁港、中央部に砂浜が形成されている。ナミベ港の岸壁水深は 5m～10m となっており、大きな埋没は見られない。

湾口部南側には水深-3m のアメリカ (Amelia) バンク (浅瀬) が形成されており船舶航行の安全上注意が必要とされている。2004 年 6 月 19 日に、この浅瀬で船舶座礁により油流出事故があり、海岸まで油が流入してきた。湾岸部の海浜では、海浜回復のため約 6 ヶ月間は遊泳禁止となったとの報告がある。また湾内の漁業活動は湾外で行っているため、事故による影響はなかった。なお、MINTRANS の出先事務所 (Capitania) が海のコンディションを担当している。また石油会社 (SONANGOL 社) では再発防止のため、各船舶にオイルフェンスと油回収装置を装備している。

ナミベ港は砂岩の台地を切土し埋立建設された。このため、港湾用地の直背後は港と台地の天端高に約 40m の段差が生じており、水に弱い砂岩台地での崖崩れが心配されている。実際に、2004 年の豪雨時に、港湾区域の北側で崖崩れがあり、コンクリートブロック塀が破損したとの被害報

告もある。

2001年に大洪水があり、水が退くまでに約1ヶ月かかった。この洪水の影響で70名以上が犠牲になった。特に犠牲になった地域は、ナミベ港とサコマール港の間に流れるBero川周辺である。

本調査期間中にナミベ港周辺沿岸部で視認された野鳥は、アオサギ、コサギ、アジサシ、カモメ等である。またナミベ湾内では数頭のアザラシも確認された。

本調査で実施した水質調査の結果、背後生活用地からの垂流しが行われているものの、オープン水域のためか透明度が高く水質汚濁の悪化は見られない。

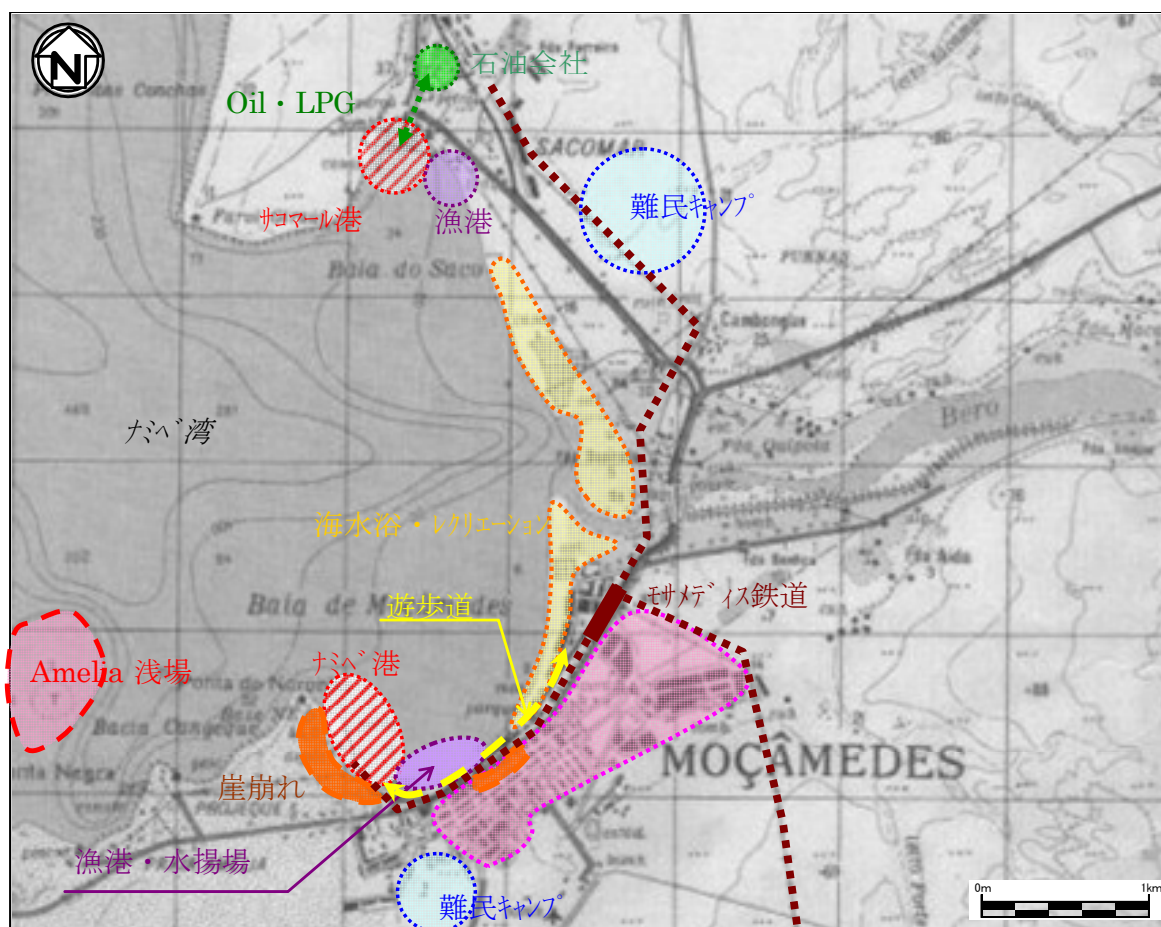


図 7-4 ナミベ港周辺の環境特性

#### 7.2.4 カビンダ港

カビンダ港周辺の水深は約3m～5mと全般的に非常に浅くなっており、港湾施設周辺も遠浅の海に囲まれている。これは西側のコンゴ川からの漂砂の影響とカビンダ港の東側にある沈船の影響だといわれており、約15年の年月をかけて現況地形となったと報告されている。現在栈橋の周辺では、計画水深を確保するために浚渫工事が実施されている。

航路も水深が浅く、栈橋から8～10マイル沖合で貨物の積替えを強いられており、沖波で危険を伴うことがある。